

## 2017年（平成29年）第5回社員総会 会長挨拶



一般社団法人へと移行してから4年が経ちました。本年は第5回の社員総会ということになりますが、開会に先立ちまして一言ご挨拶申し上げます。

昨年度も延岡支部会員のお二人が逝去されました。また、元日本歯科技工士会長の佐野恵明氏が、今年の1月25日にご逝去されました。心から哀悼の意を表しますとともに、謹んでご冥福をお祈り申しあげます。

佐野恵明氏は草野前会長時代から、本会とは大変縁が深く、日技専務時代を含めて3回程来宮して戴いたのではと記憶しております。元日本歯科技工士会副会長の伊藤保太郎氏が日本歯科新聞に“追悼記”を投稿されています。その中で佐野氏のことを「私にとってはまさに歯科技工士会のみでなく人生の師でありました」と偲んでおられますが、私も全く同感の思いであります。特に忘れ得ないのは、大臣告示に伴う歯科技工料の実務者講習会が昭和63年6月24日、自由民主党会館で開催されたときのことです。当時、歯科診療報酬表の中に、委託技工料の「制度化」を目標として一大運動が展開されていました。

あの当時の力関係では致し方なかったのではと思いますが、大臣告示という決着に愕然となり、勇気を奮い起こし顔を真っ赤にして挙手し「こんな曖昧な玉虫色の決着では、現場は混乱して実施できない」との意見陳述をしていました。佐野元日技会長（当時は専務）もまた、顔から湯気が出る如くに「宮永君！。そんな情けないことを言ってくれるな。日技は診療報酬表に技工料に関する文言は何もなかった真っ白だったところに、一応の足掛かりを作ったんだ。後は各県技が歯科医師会と話し合い、少しでも実効あるものにして欲しい」と鬼の形相で答弁されました。佐野氏の信念と行動力に圧倒され、本県では技工料に関する「県歯・県技協定」が実現できたと言っても過言ではありません。昨年度の挨拶で、料金問題は「政治家や行政、日歯や日技のみが悪いのではない。自ら安売りする技工士自身が一番悪い」と述べました。その考えは今でも変わりませんが、日技に最後のお願いをしておきたいと存じます。

公益社団法人日本歯科技工士会の杉岡憲明会長は、業界紙（日本歯科新聞）への年頭所感として“変化に対応して前進”との見出しで、『昨年は、役員選挙を経て日本歯科技工士を運営する体制を整えました。時代と環境の変化に対応しながら「次世代につなぐ」人材育成も考慮した人選をさせていただきました。二期目の会長として、私たちの国が直面する少子高齢化社会に貢献する歯科医療とそれを支える歯科技工を、より質高く家族にも社会にも誇れるものとするため、歯科技工士の社会的評価を教育、業務、経済の各方面からその役割に見合ったものにして行くため、歯科技工士のナショナルセンターとして確実に前進する一年としてまいります。』との寄稿文を寄せられています。

その方針には、地域組織を預かる会長としても何ら異論はありません。しかしながら、全国の地方組織は壊滅寸前にあります。先般開催された『全国会長懇談会』でも意見が出ましたが、会員数が二桁になりますと、組織を運営していくこと自体が厳しくなります。

佐野元会長は「発送は大きく、行動は足元から」を信念に、会務運営に携わってこられました。佐野会長後の日技会長は、中西会長、古橋会長、そして杉岡会長と続いてきました。杉岡会長には変化に対応することも大事だと思いますが、組織拡充対策と同様に「歯科技工経済基盤の確立」という変わらないもの、エンドレスなテーマがあることをお忘れにならないようお願いしたいと存じます。

技工料問題は解決出来なかった、出きっこないではなく、ご自身が述べられているように「意志あるところに道は通じる」です。この問題の解決は、後からくる者たちに対する我々の責務ではないでしょうか。「念ずれば花ひらく」という詩人の座右の銘もあります。それが実現すれば、組織拡充問題も自動的に解決し、中西会長や古橋会長のみならず、佐野会長さえも凌ぐ偉大な会長として、後世に名を残されるのではと思います。日技執行部が一枚岩となり、対処されんことを節に願って挨拶とします。

2017年6月18日  
一般社団法人宮崎県歯科技工士会 会長 宮 永 齊